



Title	オーキニ考(補説)
Author(s)	田島, 優
Citation	明治大学教養論集, 537: (1)-(13)
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/19945">http://hdl.handle.net/10291/19945</a>
Rights	
Issue Date	2018-12-31
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

## オーキニ考 (補説)

田 島 優

### はじめに

近代語学会編『近代語研究 第二十集』(武威野書院 二〇一八)に、「人情本を利用した挨拶表現研究(序説)」(以下、前稿とする)を発表した。その論考の第二節「オーキニをめぐる一において、江戸の人情本での「オーキニ」の実態について考察した。その段階では、関西で使われているようなオーキニ単独の用法には出会わなかった。その後の調査において、オーキニが単独で使用されている例を見つけることができたので報告して、江戸時代後期の江戸におけるオーキニの実態についても一度考え直してみたい。

また前稿の注において、上方の洒落本である畠中寛斎の『風俗三石土』に見られる「さやうなら、だんく、大きに」の例について疑義を提出した。この本は一八四四年に刊行されているが、畠中寛斎の死後かなりたってからの刊行である。畠中寛斎の活躍した明和・安永期からすると六十年、また亡くなってからでも四十年経っている。そのような刊行

状況であるから、畠中の原稿のままであるかわからない。挨拶表現の上からも、「さようなら」の単独使用や、「だんだん」と「大きに」とが連続している点から、安永・天明期の成立とすることに疑問が生じたのである。幸いなことに『風俗三石土』には写本が残っている。ただし、その写本には書写した年代が記載されていないので、成立した時期は不明である。調査の結果、問題となっている箇所について板本とは異なっていたので、その報告を行う。

この二点から、江戸時代における江戸のオーキニ並びに上方のオーキニについて考えてみたい。

### 一 江戸後期のオーキニの実態について

まず最初にオーキニ単独使用の用例を列挙する。列挙するといっても、現在のところ三例だけである。一例目は、松亭金水の『縁結嫉色の糸』である。この作品は天保十年から十二年（一八三九〜四一）に刊行されている。オーキニが出現するのは二編下の第十一回である。二編であるから天保十年（一八三九）の刊行である。

母一先日はもう種々御厄介になりました、有がたうございます。帰りました躰へも咄しましたら、躰も大きに悦びまして、何れ近々お礼に参ると申て居ました。コレお近や、此間の方が入したヨ

と、声かけられて彼処の部屋に、錦の桂と云へる、人情本を見て居たりしが、本を閲てたち出  
おちか一ヲや皆さんよく入ツしやいました。此間はモウ大きに

角助一これはく皆さんが、其様にお礼を被仰ちやア御挨拶の仕方がございません

ト、後に居る桂菴の顔を見て

亀戸天神の近くの料理屋で、お近と母親が武士達に絡まれていたのを、角助と桂庵が助けた。母親がその御礼をしよ

うとしたら、角助が「左様思し召なら、近日お宿へお尋ね申ませうから、當下しつかり御返礼の御馳走になりませう」と言つて別れた。その後、角助と桂庵とがお近の家を訪問した際に、お近からの御礼の挨拶表現にオーキニが使用されたのである。お近は助けられた際にもオーキニを発している。

おちか「大きにモウ有がたうございます

（二編中 十回）

この場合は、「大きに」とあり、それに続いて「モウ有がたうございます」と丁寧に感謝を述べている。「大きに」と「有がたうございます」との間に感動詞の「モウ」が挟み込まれていることから両者は連続していないと考えられる。

お近は商家の娘で十代後半である。これらから推測すると、お近の感謝表現はオーキニであったようである。後者の例は、助けられたばかりであり、感謝の度が大きいために、「有がたうございます」と改めて表現し直している。

二例目は、為永春水の『春抄媚景／英対暖語』である。この作品は梅曆シリーズ五作品の内の四番目の作品であり、天保八年（一八三七）の刊行である。その初編巻一の第二回にオーキニが見られる。

仕出し「しけでござぬます此お天氣だから、モウ今晚は早仕舞にいたすつもりでおまけ申て上ます  
ます「ヲヤ左様かね、それは大きに

話し手のますとは芸者増吉のことであり、将来結ばれる宗次郎と出会ったばかりの若い頃のことである。料理を届けに来た仕出し屋に対して用いられた感謝表現である。これと違って丁寧な感謝表現を用いる相手ではない。普通ならアリガトで済むところである。仕出し屋に「おまけ申て上ます」と言われたので、「それは大きに」とやや大きめに御礼を述べたものと思われる。

三例目は、為永春水の『春色梅美婦孺』に見られる例である。二例目と同じ作者であり、この作品は『英対暖語』の次の作品である。梅曆シリーズの最後の作品にあたり、天保十二年（一八四一）に刊行されている。オーキニは三編巻

九の第十八回に出てくる。

峯次郎「由さんとお上りな和十さんも来てお出だから

善孝「ハイ有がたふ ちよいと一ふくいたゞきませうかね

和十「善孝さん昨日は大きに

善孝「イヤ和十さん さぞ昨日はお勞れで ホン二目録が私の所に届ひて居ますヨ

善孝とは桜川善孝のことである。前の丁に「桜川善孝」〔ごぞんじの由次郎なり〕として登場してきている。峯次郎は、その善孝に対して「由さん」と呼びかけている。和十についても、登場した際に「御存の和十」〔わかつてうの太夫これもたうじのはやりツ子なり〕と注記している。春水は実在の人物を本名で作品に登場させたのである。和十と善孝とのやりとりを理解するために、両者の関係について明らかにしておきたい。

桜川善孝や和十の名は、森鷗外の『細木香以』（大正六年、一九一七）に登場している。細木香以は二代目撰津国屋藤次郎（津藤）であり、龍池は香以の父であり、初代撰津国屋藤次郎である。俳諧を好み、文人や俳優、俳諧師や狂言作者のパトロンであった。

龍池が遊ぶ時の取巻は深川の遊民であった。桜川由次郎、鳥羽屋小三次、十寸見和十、乾坤坊良斎、岩窪北溪、尾の丸小兼、竹内、三竺、喜斎等がその主なるものである。由次郎は後に吉原に遷つて二代目善孝と云つた。和十は河東節の太夫、良斎は落語家、北溪は狩野家から出て北斎門に入った浮世絵師、竹内は医師、三竺、喜斎は按摩である。

『春色梅児誉美』においては丹次郎が主役であるが、藤兵衛が脇役として重要な役回りをしている。この藤兵衛は撰津国屋藤次郎（津藤）をモデルにしており、『春色梅児誉美』では千葉の藤兵衛として登場している。ただし、梅暦シ

リーズ最後の『春色梅美婦禰』の初編や二編では津藤の名称で登場するが、五編ではこのシリーズの本来の千藤に戻っている。桜川善孝は、桜川という亭号からわかるように、幫間である。和十は、『春色梅美婦禰』には単に太夫とあるが、『細木香以』に河東節の太夫とあり、十寸見和十であることがわかる。幫間も太夫ともに、その当時は男芸者と呼ばれていた。<sup>⑤</sup>梅曆シリーズにおいては、桜川善孝といえは、由次郎の師匠である初代桜川善孝を指すことが多い。由次郎も初代善孝と同じく『春色梅児誉美』から登場しているが、由次郎が二代目善孝になったことが記されているのはこの『春色梅美婦禰』である。ただし初編ではまだ由次郎である。

園「イヤ然でございますか。桜川と被仰は何方でございますか

専「十二桜川を何処のとは何の事たへ

園「アレサ由さんか「二代目善孝」新孝さんか三孝さんか知れませんが

（三編巻八 十六回）

由次郎が二代目善孝を襲名したが、初代善孝と区別するためか、あるいはまだ由次郎の名の方が売れているためか、先のように「ごぞんじの由次郎なり」という注を施したのである。まだ詳しくは調べていないが、この時期に二代目を襲名したのであろう。なお吉原細見では天保十三年（一八四二）から桜川善孝の名が登場するが、これは時期的に二代目善孝である。鷗外の『細木香以』に「由次郎は後に吉原に選つて二代目善孝と云つた」とあり、吉原に活躍の場所を選んだことよって吉原細見に掲載されるようになったのであろう。由次郎をこの箇所で善孝としたことで、この後に出てくる善孝の記述に関して、初代なのか二代目なのか混乱をきたすことになる。『春色梅児誉美』を除いた梅曆シリーズの他の四作品は、『春色梅児誉美』に書かれていないことをまとめた拾遺である。特に四作目の『英対暖語』とこの五作目『春色梅美婦禰』には『春色梅児誉美』の前後の話が入り交じっている。『春色梅児誉美』に書かれている期間については由次郎で統一すべきなのであろうが、『春色梅児誉美』が刊行されたのは天保三、四年（一八三二、三

(三)であり、最後の『春色梅美婦禰』の刊行は天保十二年(一八四一)であり、『春色梅児誉美』からは約十年の歳月が経っている。実在の人物を登場させたために、刊行された時代の読者に合わせる必要が生じたのである。これは和十の注記についても当てはまるであろう。和十の登場は梅曆シリーズではこの『春色梅美婦禰』からである。

桜川由次郎が朝湯の婦に寄てはなしでも仕たり、丁子屋の和十子が、俳諧を進めて遊ぶなんぞといふ身の上にもなるから、何でも人の一代は定まった事はないもんだア

ふさ「(前略) 今日和十さんが、お前さんのお帰ん被成た事を、知らせて呉れましたから (後略)

峯「然か。能和十さんが、此身が昨日津軽から帰るのを知つたツケノウ

ふさ「イ、エ和十さん計じやアありません。衆吉さんには桜川の由さんが知らせましたとサ (初編巻二 四回)

船「(前略) 今日津藤さんの催しで、桜川のヤ英次さんや和十様凡而唄女衆と太夫衆で十人計、平清へお出被成た筈だそうでございます

此日迎島の別荘へ寄り集りし人々には、千葉の藤兵衛、小梅のお由、(中略) 清元延津賀、桜川善孝、同新

孝、萬蝶、和十、是等の人々を始として (五編巻十五 三十回)

和十を「丁子屋の和十子」と記していることからすると、丁子屋の内芸者ということになるか。丁子屋は、新吉原江戸町二丁目にあった有名な大きな遊女屋である。先の会話に戻るが、和十は善孝さんと呼び掛けていることから、『春色梅児誉美』の時代ではなく、由次郎が二代目善孝を襲名してからの話になる。したがって、和十に関する注記「わかつてうの太夫これもたうじのはやりツ子」の「たうじ(当時)」は、『春色梅児誉美』刊行当時ではなく、『春色梅美婦禰』刊行時の今現在という意味になろう。

さて、オーキニの使用について考えてみよう。話し手は和十である。和十が「善孝さん昨日は大きに」と述べている。

ここで、和十は「さくじつ」という漢語を用いている。それに対して、善孝は「イヤ和十さん、さぞ昨日はお疲れで」と、和語の「きのう」を用いている。和十の方が丁寧な表現をしていることになる。そして、善孝の発話の最初に「イヤ」とあり、和十の発言内容を否定している。この例も前稿で扱った『娘太平記操早引』四編(一八三九)の例と同じように考えられないであろうか。

『娘太平記操早引』は曲山人によって書き始められたが、二編上巻まで執筆して死去した。書肆の依頼によって、松亭金水が二編の中巻と下巻は曲山人の遺稿を補正して刊行し、三編と四編は金水が曲山人の草案を想像して執筆し完成させたものである。オーキニは金水の書いた四編に出現している。四編は天保十年(一八三九)の刊行である。前稿では、オーキニの用例について、まだ発話の途中ではないかと判断した。感謝の意を述べようとしたが、相手がそれを途中で遮ったのではないかと考えたのである。その作品におけるオーキニの使用を示すが、その状況を先に説明しておく。

磯次郎は養父の譲り承けた米問屋の株を継いでいるが、番頭の藤八が実質的には店を支配している。磯次郎は、昔者であったお末を女房にするにあたって、養父や番頭からその許しを得ることを友人の繁兵衛の父親である八百屋の半六に依頼したのである。半六が養父や番頭の藤八の了解を得るために出かけたことについて、磯次郎が半六に対して御礼を述べようとしている場面であり、そこでオーキニが使用されている。

磯次郎「親爺さん、此間お済み申しました、内々の事は何様でございます。まだお嘸し下さいませんか

半六「アイ今日既にその事で往たのサ

磯次郎「ハ、ア、左様でございますか。夫りやア大きに

半六「所が色々、免遠な訳もありだが。マア大概は談じも行届いたのサ



ト、云ふ顔を見て磯次郎は、完尔として手をつかへ、

磯次郎「大きに有難う御座います。何様して仲々、一通りの掛合じやア、所詮むづかしい分解でございますが、親爺も藤八も、全く貴君に免じて得心致したのでございませう (四上)

御礼の場面での使用であるから、このオーキニは感謝表現と考えられる。磯次郎と半六とは親子ほどの年齢差がある。またオーキニの前の表現に「左様でございますか」という丁寧表現を使用している。そのような状況における感謝表現としては、単にオーキニだけの使用ではすまいと思われる。そこで、発話の途中と考えたのである。磯次郎が感謝の意を述べようとした。しかし、半六がそれを遮り、トコロガという逆接の接続詞を用いて、それほど容易ではなかったことを説明している。その半六の苦勞に對して、磯次郎は「手をつかへ」て「大きに有り難う御座います」と改めて御礼を述べているのである。

金水と春水と著者は異なるが、『春色梅美婦禰』の場合においても、和十が「善孝さん昨日は大きに有り難う御座います」と述べようとしたが、その途中で善孝がイヤと相手のことを遮ったのではないだろうか。ただし、和十と善孝(由次郎)とは、千葉の藤兵衛のお供を常に行っている仲間である。また相手の依頼によって同じお座敷に出ることはごく普通なことであつたであろう。このような状況を考えると、それほど丁寧な表現をする必要がないともいえる。増吉が仕出屋に御礼を述べた際に、オーキニと述べたと同じように、和十は善孝に對して少し丁寧に述べているともいえよう。先の『娘太平記操早引』の例に關しても、「夫りやア」という融合形とともに用いられていることからすると、これも「大きに」単独の使用かもしれない。

このように考えてくると、一八四〇年頃遊廓の世界やその周辺ではオーキニは単独で感謝表現として使用されていたのであろう。ただし、増吉が宗次郎に出会つた時期とすれば『春色梅見誉美』刊行時(一八三二、三三)以前のことに

なるが、先の桜川善孝と同じように、『英対暖語』刊行時の状況とみるべきであろう。遊廓でのそのような言い方を、『縁結嫉色の糸』のお近のような若い女性も使用するようになったものと思われる。ことばの広がりからいって、遊廓のことばが若い女性に使用されるのはごく普通なことである。しかし、江戸でのオーキニ単独の使用はそれほどには広がりなかったようである。オーキニといえは、関西の表現と思うように、江戸（東京）では定着しなかったのである。

前稿では、オーキニが江戸（東京）で定着しなかった理由として、江戸においてはあいづち表現のオーキニがあることを挙げたが、『春色梅美婦禰』にも一例使用されている。

三味藤「お夏嬢も鵬居さんにやア余程墮落て居る様子だノウ

如麦「大キにサ。しかし何様も婀娜な女だヨ

（二編巻六 十回）

## 二 『風俗三石土』のオーキニをめぐって

前稿において課題になっていた『風俗三石土』についても考えてみたい。この『風俗三石土』には、「さやうなら、だんく大きに」という例が見られる。この本は京を舞台とした上方の洒落本である。漢文による序の末に天保十二年とあり、西暦に直すと一八四一年である。奥付には弘化元年とあり、これは一八四四年にあたる。「皇都 二書堂発行」とあるから京都での発行である。これらのことによって、京都でこの時代にオーキニが使用されていたことは間違いないが、「太平館銅脈先生遺稿」とある点が問題となる。銅脈先生とは畠中寛斎のことであり、彼は一八〇一年に没している。また彼が活躍したのは、明和・安永期である。『洒落本大成』二十九卷（一九八八）の解題によると、この作品は銅脈先生の活躍した時期のものだとする。作品中に「タンノウ」という囃子詞が使われており、この囃子詞のある流

行歌が江戸で行われたのは安永五年(一七七六)であり、この流行歌が上方に移って採られたとすれば、安永後半期か天明初年ごろの成立だとする。

拙稿「さようなら考」で扱ったように、「さようなら」が単独で使用されるようになるのはもう少し後のことである。ただし、別れの挨拶ではなく接統詞として解釈すればこの点については解決するが、ダンダンとオーキニとが接続している点に関してはまだ問題が残る。これらの点から、前稿ではこの用例を安永・天明期の成立と考えるのに疑問を呈した。『風俗三石土』の写本が京都大学附属図書館に蔵されている。写本と板本との異同については、小林勇氏が『風俗三石土』板本の錯丁に就いて『親和国文』二四 一九八九)において、「大きな異同はないものの語句の細かな違いは枚挙に遑のない程多く存在」しており、「出版に際して原文に手が加えられた可能性も考えられる」と述べている。京都大学附属図書館蔵の写本については、既に斎田作樂氏によって『銅脈先生全集 下』(太平書屋 二〇〇九)に翻刻されているが、写本には朱での書き入れがあるということなので、京都大学附属図書館で閲覧した。

発話主と会話の区別がわかるように会話の最初に鈎括弧を施し、問題の箇所の前後も含めて記しておく。まず刊本の方を先に挙げる。

花車「御立じやぞへ「みなく二かいを下り上り口にて茶をのみ」 修「また近日く 富「お中さんのいへ」花車富代おくる」花車「あんたおまちお羽織のゑりが「卜兵馬のゑりををりて」 富「まそつとしづかにおゆきいナア 花車「さやうなら だんく大きに 岩さん どなたも またお近いうちに「三人かんばつた声してそこく」にこたへ 小うたうたひ 半丁ばかりもきたりて」

(下 一三三才)

花車(茶屋の女主人)が客を送り出す際に「さやうなら だんく大きに」と述べているのである。一方、写本では次のようになっている。

花車「お立なさるそへ「皆々二階を下り上り口にて茶をのむ」修理「また近日く」けいこ「お仲さんのへ  
 「花車けいこ」送る 花車「あなたのお羽織の衿が折しすにござります けいこ「まそつとそろくいき 花車  
 「もう参りませぬお近い内へ」「三人かんはつた声してそくくくにこたへ小歌なとうたひゆく」 (十八才)

板本に見られた「さやうなら だんく大きに」は写本にはない。この写本の成立年代はわからないが、板本刊行以前であることは間違いないであろう。この挨拶表現は、板本として刊行される際に書き加えられたものと考えられる。<sup>5)</sup>すなわち、このオーキニは明和・安永期の使用ではなかったといえよう。

オーキニの使用者は茶屋の主人である。オーキニを使用するにあたり、副詞ダンダンを伴って使用している。京都においては、安永・天明期にはダンダン自体がすでに感謝表現として成立していた。すなわち、その時期の作品であるならば、ダンダンの一語だけで感謝表現としては十分であった。ダンダンが副詞として、また本来は副詞であるオーキニと共に使用されている状況を考えると、オーキニが新しい感謝表現として登場してきたことによるものと思われる。中国や四国、九州地方など、ダンダンが感謝表現として使用されていた地方において、新しくオーキニが伝播してきたところでは同様の現象が見られる。<sup>6)</sup>ここでは、茶屋の主人から客への御礼の挨拶として、丁寧さを加えるために感謝表現のオーキニに強調の副詞ダンダンを添えたのであろう。

オーキニの使用については、『角川古語大辞典』（第一巻 一九八二）には「大きにありがたう」を略した謝辞としての「おほきに」は、近世の上方語にはいまだ用例を見ない」と述べられているが、この作品によって遅くとも奥付の弘化元年、すなわち一八四四年までには使用されていたことがいえる。現在はコーパスでの研究が盛んであるから、さらに古い用例が見つかるかもしれない。

## おわりに

第一節では江戸におけるオーキニの使用について、前稿では見つけられなかったオーキニの単独で使用されている確定した例を示すことができた。為永春水の『英対暖語』や『春色梅美婦禰』の例によって、オーキニは一八四〇年頃遊廓で使用されていたことがわかる。また、松亭金水の『縁結娼色の糸』から、それが若い女性にも伝わっていたようである。春水が『処女七種』(一八三六)において「近來、僕が綴りし人情本にて、当世の江戸詞を諸国の娘御達も大かたはよみ覚へたまひし由」(初編巻中 四章)と述べているように、若い女性達は江戸のことば(芸者のことば)を人情本によって覚えたのであろう。特に江戸においては、若い娘達は習い事などで芸者に接することも多く、憧れて使用したり、また無意識に使用するようになったものと思われる。

第二節では、『風俗三国土』に見られる「さやうなら だんく／＼大きに」の例について、著者とされる畠中寛齋によるものなのか、刊行時に加えられたものなのかについて、京都大学附属図書館が所蔵している写本を調査した結果を示した。写本には「さやうなら だんく／＼大きに」の記述はないので、板本に見られる例は寛齋の活躍した安永・天明期の表現ではなく序にある天保十二年(一八四一)あるいは刊行された弘化元年(一八四四)によるものと考えられる。

第一節の江戸の状況と第二節の上方の状況とによって、上方江戸ともに一八四〇年前後という、ほぼ同時期にオーキニが感謝表現として使用されるようになったことが明らかになった。しかし、上方では現在でも使用されているのに対して、江戸(東京)では明治時代以降の使用を確認できない。なぜそのような状況になったのかについては、先に挙げたあいつち表現のオーキニに加えて、他の要因も考えてみたい。今後の課題である。

注

- (1) 割書は「」で示した。
- (2) 和十は、為永春水の『種色艶麗／処女七種』(初編巻上 一章 天保七年／一八三六)に次のように出てくる。  
 おとよ「それでも昨日丁子屋の和十さんと、桜川の由さんが、岡本の前で「これはかやば丁、ごぞんじのうなぎやのことなるべし」逢たらネ
- (3) 和十のことを『春色梅美婦禰』では「わかてうの太夫」と記しているが、『処女七種』では「太夫」を「男芸者」と記している箇所がある(一章)。
- (4) 拙稿「さようなら考」(『東海学園 言語・文学・文化』十七号 二〇一八)
- (5) 矢野準氏「近世後期京板語に関する一考察」(『国語学』一〇七号 一九七六)によれば、『風俗三石土』には大坂の洒落本でよく使用されているが、京都板の洒落本にも全く認められない敬語辞「ナハル」が使用されているという。この点においても、島中寛齋とは異なる手が加わっているといえよう。また、オーキニの使用も大坂によるものなのかもしれない。
- (6) 『方言文法全国地図』第五集二七〇図(国立国語研究所 二〇〇二)参照。

付記 『縁結娼色の糸』については東京大学文学部国語研究室蔵本を、『風俗三国土』の写本については京都大学附属図書館蔵本を利用した。閲覧を認めて下さった各機関に御礼を申し上げます。また、『英対暖語』と『梅美婦禰』については早稲田大学図書館の古典籍総合データベースを、『処女七種』は東京大学文学部国語研究室の日本語史研究資料を利用した。

本研究は、JSPS科研費、基礎研究(C)一発想法による挨拶表現の歴史的要遷と地理的分布の総合的研究」(P16 K02740)の助成を受けたものである。

(たじま・まさる 法学部専任教授)